
ディフレンスペアレント

忍野八雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ディフレンスペアレント

【Nコード】

N3366BA

【作者名】

忍野八雲

【あらすじ】

涼宮さんの小説です。

といってもサイトのを加筆修正しただけでしたが。

では、どうぞ！！

制服の衣替えとはなぜこの時期なのか。

たしかに久しぶりにブレザーを着るのは新鮮さがあると言うもんだが、しかしもう少しタイミングというものは大事であろう。

このオーブントースターを使いおえた直後のような残暑の中。冬服を着て授業を受けたいなんて奴は誰もいないだろう。いるとすれば、生徒会役員とかか？

まあ、普段からやる気ない俺は別としてだが、しかしそんなだるい俺でもこの半年で身に着いた習性のせいで、意外にも俺をあの方ファントステイック女が設立した奇妙な団へと足を向けるのであった。そんなわけで、俺たちが根城にしてる文芸部室のドアの前に着いた俺なんだが、忘れてはいけない。

何をだつて？

それはノックをすることである。

別に文芸部室だし自分が所属？してるんだから、ノックの必要はないと思われるが、ここはあくまでSOS団という奇妙な団の部室であつて、文芸部はそれを首肯で承諾しているだけである。

そのためいきなりドアを開けたりなんかすると、着替え中の美女の悲鳴がもれなくついてくることもあるというわけだ。

谷口ならそんなこと気にせず入る気はするが、俺はぜってえしねえ。俺の場合ノックとともに聞こえる天使のような朝比奈・Sボイスから始まるのが、もっとも望ましいと考えているので、そう言った理由から目かさないようにしている。

まあ、身の上話はこころ辺にしまして、ノックをしたのだが、扉の向こうから聞こえたのは予想とはまるで違っていたのであった。

「入りなさい！！」

この雄叫びについては大体の理解はできた。

俺はさっきのクリスマス近くの子供のテンションから実はサンタがお父さんだった、と知ったぐらいまで下げられ、それでもかすかな希望を胸に扉を開けた。

.....

残念ながらそこには俺の希望をベルリンの壁のごとくぶち壊す風景が広がっていた。

いつものように、健気にもメイド服を着続けている朝比奈さんが「ちょっとまっててくださいね」とこのために生きていると言えそうなお茶をいそいそと準備してくれているのと、それを横目にとにかく全く見向きもしない現文芸部員の長門が俺のような男は一生かかっても触ろうとしないと思われるほどに、厚くページの文字の密度が高い本をすらすらと読んでいる姿と、まあついでに、「これでもやりましようか？」とム力つくほどにニコニコイケメン顔で、ゲームを進めてくる古泉がいるような感じなのだが。

そこには、珍しく早い団長閣下こと涼宮ハルヒが一番奥にある団長席にふんぞり返っているだけ。そう、だけであつた。

俺は何とも言えない気持ちになつたが、それは明らかにハルヒにつつまれそうだったので「オッス」とだけ言い俺の席？まで、極力普通の顔でいるように努力した。席に座りカバンを指定の位置に置いて一息つくと、驚くべき現象が起こつた。

何と、ハルヒが俺に茶を淹れてくれたのだ。

なんだ、ドツキリとかじゃないよな。俺はかからんぞ、多分。

「ほら飲みなさいよ。後、勘違いしないでよ？自分の入れるお茶が余つたから注いだだけなんだから……。あくまでもつたないって

「だけよ」

ああ、やっぱりいつものハルヒである。

俺は一応礼を言い茶を飲んでみた。

む、うまい。なかなかである。

この団の女子勢はみんな茶を入れるのがうまいのか？

これからは時々お前も入れたらどうだ？朝比奈さんも楽できると思うぞ？まあ、あの茶も飲みたいが。

俺は自分の感想をすべてさらすことなく、ここは察しとけよ。なかなかうまいな、とだけ言っておいた。

するとハルヒは机に戻り何か書きこんでるようだった。……なんとなくだが詮索はしないようにしよう。

俺は切りの良さそうなところで部屋に入ってから疑問をぶつけた。

「なあ、朝比奈さんや長門とかがってどうしたんだ？」

それに対し何か咎めることなくハルヒは普通に答えた。

「なんか、みくるちゃんはどうしても抜けられない用事があった、聞いても『禁則事項です』としか言わないし有希はどうしてもほしい本が今日発売日だからって言って、すごい勢いで帰ってったわよ」

ふむ、二人が休むなんて珍しいことこの上ないな。

「そうよね。みくるちゃん是用事ってのはしょうがないとして、有希が本買いたいからってだけで休むなんてなんかおかしいわよ。あの娘が休むなんて一番ないと思ってただけだなあ」

まあ、大方それらは嘘で、情報統合思念体とか未来とかそこらへん

となんかあったかと言つとこだろつ。ハルヒ関連なら俺も呼ばれる
気もするしな。

「それはそうとして、古泉君のことは何か知らない？アンタの方が
聞いてる気がするんだけど」

あ、そういや、

…

……

……………

俺はいつものように谷口と国木田の3人で昼飯を食おうと声をかけ
られた時だった。

爽やかな笑顔の古泉が教室のドアから俺を呼んでいるのに気付く。
俺的には古泉が進んで俺のところに来る場合は、大抵がハルヒ関連
ということを知っていた俺は、おもゝい腰をあげながら二人に行つ
て来る的なことを言つて、古泉のそこへ向つた。

「いやあ、すいません。涼宮さんはいますか？」

しらん。学食とかじゃねえのか？昼になるといつもいねえから、い
る時はいるで俺の弁当食つちまうし。

すると古泉は肩をすくめるような仕草をして、

「ほう、なかなか仲がよろしい様子で、私としてはうれしい限りで
すねえ」

茶化すのはやめろ。

「しかし、いないとなると困りましたね…」

ん？ハルヒ関連でなんかあったんじゃないのか？

「ご安心ください、そんなことは全くありませんよ。それとも、なくてはここに赴いてはいけないのでしょうか」

ならどのような用件なのかということになるのだが、

「そうです…！」

あまりにわざとらしい。

「あなたに言つてを頼めばいいではないですか」

やはりな。ていうか最初からそのつもりで来ただろ、お前。

「いえいえ、そんなことはありませんよ」

このニヤケ顔は信用できない時があるな。今回はできない方になるのだろうが。

「それでは今日休みます。バイトが緊急に入ったので、とお伝えください」

だれがやると言った。まあ、いい。んでバイトと言うとあの化け物退治か？

「いえ、機関の定期集会のようなものです。今回は時間の都合上重なってしましましてね。本当にすみません」

嗚呼、分かったわかった。伝えとくよ。それより俺に飯を食わせろ。
時間がなくなっちまう。

「ああ、すいません。それでは失礼しました」

と言って帰って行ったので、俺は急いで机に向かったのだが、そこ
には空の弁当箱といつの間に帰ってきやがったハルヒがいた。

……学食、足りなかったのか？

………

……

…

てなわけで俺は機関とか化け物退治とかハルヒが喜びそうな単語を
端折りながら、古泉の欠席理由を伝えた。

「へえ、古泉君は大変ね。部活とバイト掛け持ちなんて」

いや、部活の方はお前がひきつれてきたんだろうが。

ハルヒは全員の欠席理由を知るとすつきりした様子で、

「んじゃ、今日は帰りましょうか。二人きりっていうとバカキョ
ンに変なことされそうだし、やることはないしね」

普通最後のを前者に言わねえか？ていうかなんだ、変なことって。
失礼だな。今に始まったことじゃねえが。

まあ、それには賛成だ。

こいつと二人でいると、ロクなことに巻き込まれかねん。

前は閉鎖空間とか言うところに閉じ込められキスしたり、他にも校庭に石灰をひかされたりしたしな。あ、これは3年前の話か。するとハルヒが準備を終えたらしく、

「それじゃ、先に帰るわね!!」

と言に残しハルヒが去っていった。

……………

その後、家に帰ってもやることがないので、俺はなんとなく部室でボーっとしていた。

俺はふと団長机の下に置いてある。可愛らしいと言えば可愛らしい。女子の私物的な日記帳的なものが置いてあることに気付いた。

この机に置いてあるとするとハルヒ？もしかしてさっき書いてたのはこれか？なんて変な憶測をしてみると、妙な欲求がわいてきた。

読んでみてえ……。

そう読みたい。

男子には時々払い難い欲求がきたりするもんだ。俺は大した葛藤をせずに、スパイ的なあからさまな周りの確認をした後に、日記の中心を見てm……。

「忘れもの!!」

そう言ってハルヒが再び部室に降臨してきた。

「なに？アンタまだいたの？」

ああ、いちゃ悪いか？

「別にかまわないけど…ん？」

そう言う俺が持つてゐる日記帳に目がいつていた。あのハルヒさん？あなた、どこかの星の戦闘民族ばりのオーラの物をまとわれてるようではないのですが。

「まさか、それ読んでないでしょうね？それ私のなんだけど」

俺はどうしたらいいかわからなかった。ここで読んだと言おうが読まなかったと言おうが、死亡フラグは確実に立つだろう。

「読んだのね……」

俺は静かでここまでの殺気を感じたことはない。が、おそらく街中で理不尽にもやくざに絡まれている時と同じ心境だろうか？いや、相手はハルヒだ！きつとやくざも赤子同然なのではないだろうか。俺は耐えきれず頷いてしまったと同時に、ドロップキックが入ったことは言うまでもないだろう。

その帰り道。

「何よ、ただ持っただけで読んだんじゃないの？」

だからそう言ってるだろ。

俺はあの悲劇後、5分ちよいぐらい弁解した。その結果、やっとこさ理解してもらったのはいいのだが、なぜかハルヒと帰ることになっ
っている俺というわけである。

「でも、あの時頷いたあんたが悪いのよ。頷いちゃったら全部読んだと思うじゃない」

ああ、そうかいそうかい。反省の色はなしですか。あ、そういえばアレには結局何が書いてあんだ？

「う、ううう…うるさいわね！！バカキョンが！」

と、ハルヒは叫び、照れ隠しなのか走って行った。

俺はフーツと息をついた。

……こうしていると二人になることは少しはいいものかも知れんな。

ほかの奴らという時より何か知らんがまた違う気持ちになれる気がする。

それに長門や朝比奈さんとまあ古泉とSOS団としている時と比べると、また違うハルヒが見れたと思う、なんて孫を見ているジジイが愛娘を見ている親バカのような気持ちに浸っていると、ハルヒがしばらく離れたとこでこっちに向きなおり、手招きしてるのが見えた。

+

実はあの日記帳の中身を少しだけ見てしまった。まあ、ハルヒが来るまでの一瞬だがな。

なんか傘らしき絵とあいつの名前が見えた気がしたな。ホントあれ

は何の日記なんだろうかね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3366ba/>

ディフレンスペアレント

2012年1月8日19時50分発行